

播磨北西部の古代・中世鉄生産研究の動向

村上泰樹

はじめに

平成二七年から始まったひょうご歴史研究室たたら製鉄研究班は、播磨北西部に位置する佐用町・宍粟市をフィールドに、考古・文献の両部門から古代〜近世のたたら製鉄の基礎的研究を進めてきた。研究会には班員以外にも外部の研究者も参加し議論を深め、その成果の一部は『紀要』で発信してきた。本稿が対象とする古代・中世製鉄研究の成果に関しては、ひょうご歴史研究室紀要第三号の特集「播磨のたたら製鉄」をはじめ、同四・五・七号で随時発表^①してきたが当班の調査研究活動は本年度でその役目を終えることになった。本稿ではこれまでの研究成果をまとめる意味で、特

集「播磨のたたら製鉄」以降の考古学分野の古代・中世製鉄研究動向について紹介し、総括としたい。

一、古代・中世製鉄遺跡の分布

図^②1は古代・中世製鉄遺跡の分布を表した図である。その分布は紀要三号で紹介した二〇一八年当時と変わっていない。中世製鉄遺跡についても同様で、新しい発見が加わることはなかった。佐用町、宍粟市波賀町域については「兵庫県生産遺跡分布調査」の一環で、製鉄遺跡の分布調査が行われ詳細な報告^③がなされたが、揖保川上流域の宍粟市一宮町・千種町域については不明な点が多い。両地域の詳細な調査が進展すれば、播磨北西部の鉄生産の状況がより明らかになると考える。した

がつて、古代・中世の製鉄遺跡とその分布状況は従来の資料を取りまとめたことをお断りしておく。

製鉄遺跡の分布は佐用町を中心とした千種川上流域と宍粟市内を流れる揖保川最上流域に分かれる。とくに、千種川支流佐用川沿いの佐用町大撫山麓周辺は、七世紀代のカジ屋遺跡(5)、六世代まで遡るとの評価がある金屋中土居遺跡(4)や奈良時代に比定される製鉄遺跡が集中する。佐用町東側、千種川本流域には熱残留磁気測定値A・D・六七〇年前後の横口式炭窯をもつ東徳久遺跡(9)、奈良時代初頭の西下野製鉄遺跡(13)が存在する。また佐用川源流域の日名倉山麓には滝谷U遺跡(33)等の中世製鉄遺跡が分布する。宍粟地域の千種川源流付近にも一四世紀に比定される高保木製鉄遺跡(32)がある。

千種川上流域およびその支流域には古代製鉄遺跡が、源流付近には中世製鉄遺跡が分布する傾向が見とれる。

一方、宍粟市北部域の揖保川支流引原川沿いは、古代から中世への過渡期の安積山遺跡(30)をはじめ、小野段林遺跡(37)など、中世製鉄遺

跡が分布している。また揖保川支流志文川の源流域付近には一四世紀中心に操業した小茅野後山遺跡(31)が分布する。

揖保川流域の分布状況は、中世への過渡期の安積山遺跡を含め、中世の製鉄遺跡が主体である。

二、古代製鉄研究の動向

播磨北西部の古代製鉄研究については、上栿武氏、大道和人氏による二つの注目すべき研究がある。いずれも、播磨の古代製鉄の開始と周辺地域との製鉄技術交流に触れる研究である。古代吉備地域からの技術移転に触れた上栿氏の研究については、すでに『ひょうご歴史研究室紀要』で公表されているが、大道氏の研究成果については研究会内部発表にとどまってしまい、外部への情報発信ができなかった。

まず古代吉備との製鉄技術交流について論考した上栿氏の論文に触れる。

上栿氏は製鉄炉の地下構造が長幅比一・一〜二・一の方形ないしは長方形のものを方形箱形炉(

型)、地下構造の長幅比は同じで、平面形が円形あるいは楕円形のを円筒炉・楕円形炉(1型)に分類し、方形箱形炉は岡山県域、円筒炉・楕円形炉は広島県東部に分布することを指摘している。さらに方形箱形炉(1型)を細分し、土坑を掘削する地下構造をもつ1型と地面を浅く掘り窪めるが、小口部が立ち上がらない溝状炉床(2型)に分け、内部に礫を使用しないものを2d型とした。そしてこの方形溝状炉床の製鉄炉は、兵庫県に隣接する岡山県北東部美作地域に分布することを明らかにした。さらに製鉄炉に付属する周溝に着目し、溝状炉床(2d型)をもつ七世紀後半の下坂遺跡(岡山県勝田郡勝央町)の製鉄炉1(図2-2)と播磨佐用町カジ屋遺跡(図2-1)の付属施設、地下構造が類似することを指摘した。両者の製鉄遺構は馬蹄形周溝をもつ溝状炉床(2d型)で周溝と排滓溝の接続状況も同じで、両者は極めて高い類似性をもつ。ただ製鉄原料は、下坂遺跡が鉄鉱石・砂鉄であるのに対して、カジ屋遺跡は砂鉄のみ使用しているという違いがある。上村氏は両者の技術的共通性と、下坂遺跡のある

美作国勝田郡内の製鉄を裏付ける荷札木簡⁽⁵⁾の存在などから、この現象を美作国勝田郡から讃容郡(佐用郡)への製鉄技術の移転と捉えた。その伝播経路として、下坂遺跡から吉野川や梶並川の河川を北上し、美作国から播磨国へ続く、後の古代美作道に該当する陸路の可能性を具体的に論じた。下坂遺跡の年代は七世紀後半とされている。これに対してカジ屋遺跡は周辺の遺跡の事例から奈良時代の範疇⁽⁶⁾あるいは、六世紀代まで遡る可能性が考えられているが、その年代は確定的ではない。また大道氏もカジ屋遺跡の年代について言及されており、カジ屋遺跡製鉄炉の地下構造を炉長軸50cm、掘形長方形・正方形のA2類に分類し、吉備地方に起源をもつ地下構造で、七世紀第2四半期(第3四半期と下坂遺跡と同様の年代を想定されている)⁽⁷⁾。筆者はかつてカジ屋遺跡の年代を七世紀以前に遡る可能性を考え、播磨の製鉄開始時期の製鉄炉の可能性を考えた⁽⁸⁾。しかし下坂遺跡の年代と讃容郡への製鉄技術移転の可能性を考慮すると、カジ屋遺跡の年代は、下坂遺跡のしめす七世紀後半ないしはそれ以降の可能性も考慮せざるを

遺跡番号	遺跡名	炉下部構造			炉規模が推定されたもの		操業年代
		長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	幅(m)	
2	坂遺跡	1.3	0.7	-	-	-	8世紀後半
3	永谷C遺跡	2.4	1.4	-	-	-	8世紀後半
4	金屋中土居遺跡炉床2	-	1.3	0.2	-	-	6世紀代or平安時代
	同 炉床3	1.7	0.7	-	-	-	
5	カジ屋遺跡	1.3	0.7	0.1	0.7	0.5	7世紀後半?
6	横坂丘陵遺跡	1.05	0.4	0.03	-	-	奈良時代
	永谷B遺跡炉2	2.0	0.7	0.4	-	-	
7	同炉3	3.0	1.5	0.3	-	-	8世紀中頃
	西下野遺跡A地区上部域炉	2.16	1.7	0.25	-	-	
13	西下野遺跡A地区下部域タタラ炉(イ)	1.1	1.0	-	-	-	8世紀初頭
	B地区下部域炉	2.25	1.24	-	-	-	
	安積山遺跡大型炉	4.6~7.0	1.2~2.0	0.3~0.4	2.8~3.4	0.7~1.1	
30	同 小型炉	3.0	1.0	-	-	-	平安時代後期~末期
	同 特殊炉(播磨型炉)	2.9	1.7	0.25	0.9	0.3	

表1 古代主要製鉄地下構造の規模

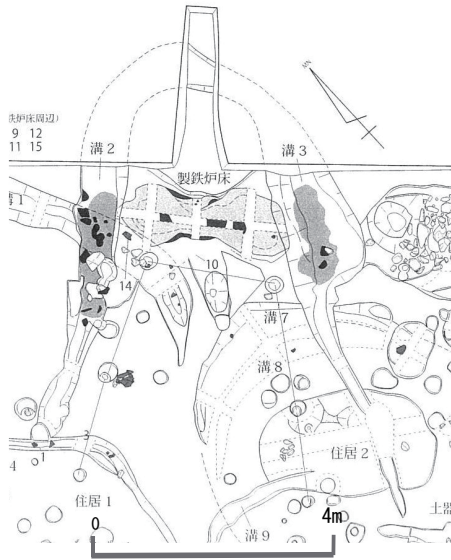
文を発表されている。ここでは二〇二〇年に島根県古代文化センター編『たたら製鉄の成立過程』に掲載された論文と、ひょうご歴史研究室たたら製鉄研究会の発表成果をもとに、大道氏の見解を紹介する。前提として、氏の分類による製鉄炉地下構造の類似性とその分布状況は、製鉄技術交流を示すという視点ですすめる。

氏は箱形炉を設置方法（横置き、縦置き）、長

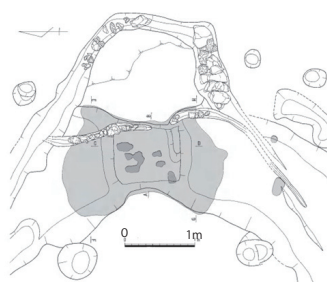
得不いと結論に至った。次に播磨地域と京都府・滋賀県内の古代製鉄遺跡の地下構造に言及した大道氏の研究に触れる。氏は近畿地方を中心とした古代製鉄炉地下構造について、すでに幾つか論

さ（五〇cm前後、一〇〇cm前後、一五〇cm前後、二〇〇cm前後）、地下構造の構築方法から近畿地方の古代製鉄炉を形態分類している。播磨の古代製鉄炉のうち、七世紀後半のカジ屋遺跡（図2-1）は、炉長軸内寸五〇cm前後で長方形ないしは正方形の掘形をもつ岡山県総社市板井砂奥製鉄遺跡を指標とする大道分類A2型（近畿4型・板井砂奥型）に分類され、備中地域との関わりをもつ。また八世紀後半の永谷C遺跡（図2-3）と八世紀中頃の坂遺跡（図2-4）は、炉長軸内寸一m前後の福岡市大原A遺跡を指標とする大道分類A3型（近畿5型・大原A型）に分類される。A3型は八世紀後半の京都府京丹後市遠所遺跡芦名地区A地点で確認されており、その分布は近隣では丹後地域に集中する。

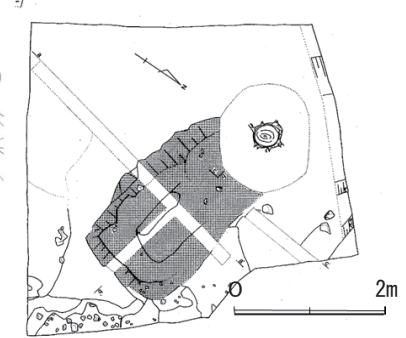
七世紀後半の可能性が指摘されている東徳久遺跡と奈良時代の可能性をもつ横坂丘陵遺跡（図2-5）は、炉長軸寸法が五〇cm前後で地山に直接粘土を貼り炉底とする岡山県津山市大蔵池南製鉄遺跡を指標とする大道分類B型（近畿6型・大池南型）に分類される。B型は七世紀末から八世紀



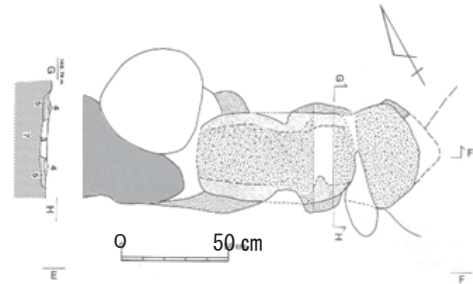
1 カジ屋遺跡 (大道分類 A2 型)



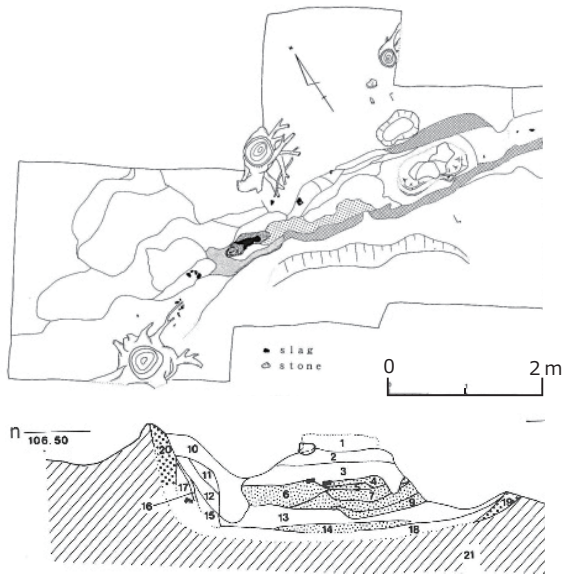
2 参考: 下坂遺跡



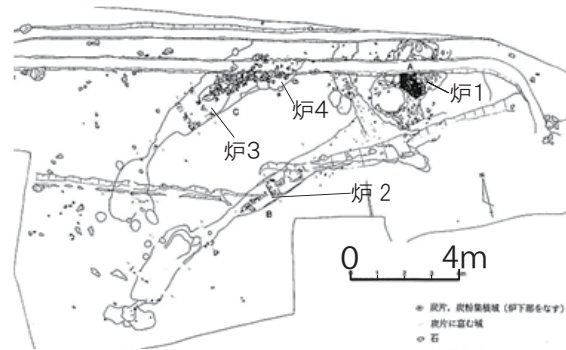
3 永谷 C 遺跡 (大道分類 A3 型)



5 横坂丘陵遺跡 (大道分類 B 型)



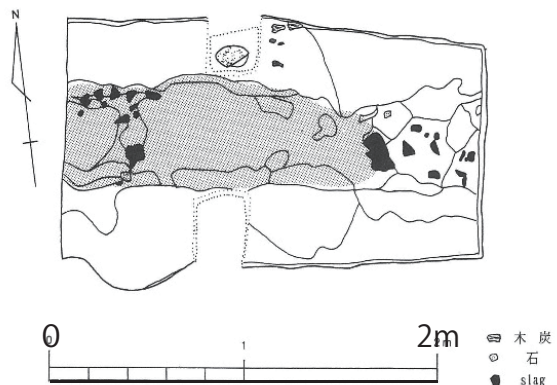
4 坂遺跡 (大道分類 A3 型)



6 永谷 B 遺跡 (大道分類 E12 型)



7 西下野遺跡 B 地区 (大道分類 E12 型)



8 金屋中土居遺跡 2 号炉 (大道分類 E12 型)

図 2 古代の製鉄炉

初頭の草津市野路小野山製鉄遺跡があり、その分布は吉備地域から近江地域に及ぶ。

奈良時代初頭の西下野遺跡B地区下部領域(図2-7)と八世紀中頃の永谷B遺跡(図2-6)、六世紀代ないしは平安時代に比定されている金屋中土居遺跡(図2-8)は、炉内長軸内寸二m前後、溝内に炉の地下構造をもち、排滓は両小口で行うタイプで、六世紀後半の京丹後市遠所遺跡通り谷地区O地点を指標とする大道分類E12型(近畿1型・遠所型)に分類される。このタイプは丹後地域に多く分布し、九世紀まで続いている。

氏は播磨の古代製鉄炉の形態分類、分布状況、製鉄原料(高チタン砂鉄)の把握という確認作業を行った上で、古代播磨の製鉄技術(A2型・B型)は、吉備(備中・美作)の高チタン砂鉄原料地域から導入された可能性を指摘した。

また播磨の箱形炉は、大道分類A2型のカジ屋遺跡(七世紀以前)、B型の東徳久遺跡(七世紀後半?)、横坂丘陵遺跡(奈良時代)など炉規模五〇cm前後、方形・長方形の地下構造をもつ小規模な炉から、地下構造が長軸内寸一m前後の長方

形を呈する大道分類A3型の永谷C遺跡(八世紀中頃)、坂遺跡(八世紀後半)、そして長軸内寸が二m前後の長方形の炉地下構造をもつE12型の西下野遺跡(奈良時代初頭)、永谷B遺跡(八世紀中頃)へと、炉の長大化(大型化)がすすんだ可能性を想定している。

このような古代播磨の箱型炉の変遷過程は、製鉄開始期から長大化した箱形炉を用い、高チタン砂鉄原料を用いる丹後地域(E12・21・22型)や近江(E11・21・31型)の箱形炉の変遷とは異なる発展段階を示すと指摘した。

ここで問題になるのは、播磨の製鉄開始時期にかかわるカジ屋遺跡と金屋中土居遺跡である。

カジ屋遺跡の年代については先に述べたように六世紀に遡る可能性を考えていたが、上村論文が指摘したカジ屋遺跡製鉄炉と七世紀後半の下坂遺跡製鉄炉地下構造の類似性を考慮すると、カジ屋遺跡は下坂遺跡と同等の年代に修正せざるを得ない。大道氏の『たたら製鉄の成立過程』と兵庫歴史研究室内部研究会発表は、カジ屋遺跡の年代を六世紀まで遡る可能性を示唆した私の見解を踏ま

えた検討であった。そのためカジ屋遺跡が古代播磨製鉄開始時期を示す遺跡との評価に導いてしまった。今回のカジ屋遺跡年代の修正に伴い混乱を招く結果となり、筆者の浅学菲才を深く反省したい。

『播磨国風土記』(以下『風土記』) 讃容郡条には「(鹿庭山)山の四面に十二の谷有り。皆、鉄生ふること有り。難波豊前朝廷に始めて進りき。見頭しし人は別部犬にして、其の孫等奉発る初めなり(原漢文)」⁽¹⁰⁾によると、播磨で製鉄を開始した別部犬の孫の代に難波豊前朝廷(六五二丁四)に鉄を納めたとあり、六世紀末から七世紀初頭には播磨で鉄生産が開始されていたと考えられる。そこで、土佐雅彦氏・大道氏が播磨の製鉄開始にかかわる候補の遺跡と評価した坂遺跡・金屋中土居遺跡について述べる⁽¹¹⁾。まず吉備地方を起源とする炉長軸寸法1m前後の坂遺跡の年代は、炉中央割り部上層より採集された炭化材サンプル一点で、C年代測定法の結果はA・D・七五〇年前後を示している⁽¹²⁾。報告文にも記載されているように測定には複数のサンプルが必要で、この点に問題はあるが、それ以上の時代決定資料がないため、現状では八

世紀中頃と理解しておく。

問題は金屋中土居遺跡である。同遺跡の炉は軸長寸法1・7mと長大で、時期は出土したとされる須恵器から六世紀第4四半期〜七世紀代第1四半期と考えられていたが、後の資料精査で須恵器の所在が不明であることが判明した。このため現地の見解では、周辺の遺構の年代観から八世紀代と考えられている⁽¹³⁾。筆者も先の論文ではこの見解を支持したが、本稿では両論併記にするのが妥当と考えるに至った。仮に六世紀代とすれば、大道氏がかつて示した、播磨では製鉄開始時期からすでに炉の長大化が始まっていたことになり、その現象は丹後・近江地域の変遷と整合することになる。

古代播磨の製鉄開始時期の確定は、古代吉備地域(備中・美作)から近畿地域への製鉄技術の伝播を考える上で重要な事項である。今後は、金屋中土居遺跡の再精査はもちろんのこと、発掘調査等新たな検討資料の増加を待ちたい。その際、製鉄炉の年代確定の検討資料のひとつとして、複数サンプルの科学的年代測定法の活用を望む。

三、古代末から中世製鉄遺跡研究の動向

(1) 古代末の安積山遺跡

播磨の中世製鉄に触れる前に、古代から中世への過渡期の状況について述べる。この時期の製鉄遺跡は、宍粟市北部域、揖保川とその支流である引原川合流地点に立地する安積山遺跡（一宮町）が知られている。遺跡の立地する地点は、播磨南部域から揖保川、引原川沿いを北上し、但馬、因幡方面へ向かう道の分岐点にあたる。

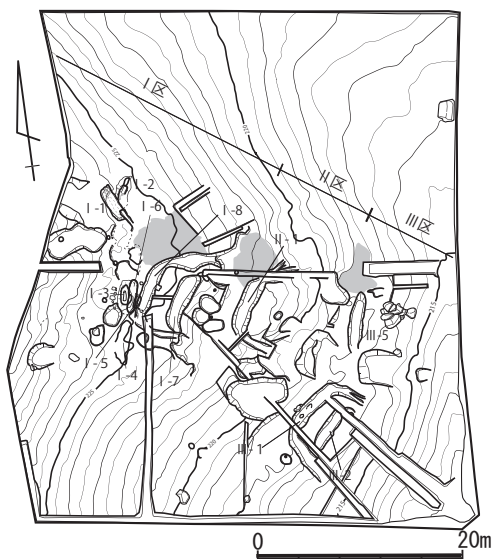
安積山遺跡は、平成五年（一九九三）の確認調査から始まり、平成二〇年（二〇〇八）にかけて六カ所の調査が実施された。うち四カ所の調査区（H六・調査区、H一九・区、H二〇・北区、H二〇・南区）で二二基の製鉄炉が確認されている。このうちH六・調査区の成果について概報¹⁴が公表されている。遺跡の年代は一二世紀後半〜一三世紀と考えられており、播磨における古代末から中世にかけての過渡期の鉄生産を明らかにする重要な遺跡である¹⁵。このため、ひょうご歴史研究

室たたら製鉄研究班は、遺跡の全体像を探るため、令和元年（二〇一九）年から資料調査を継続してきた。途中コロナ禍の影響を受け、調査が中断したため、個々の製鉄炉の構造把握までには至らず、各調査区の全体像の把握、炉壁片、出土品などの検討に終わってしまった。今回、宍粟市教育委員会のご厚意で安積山遺跡各調査区の全体図を掲載することができた（図3）。安積山遺跡の詳細については、すでに『ひょうご歴史研究室紀要第五号』で詳細に報告している。ここでは要点のみ抽出して述べる。

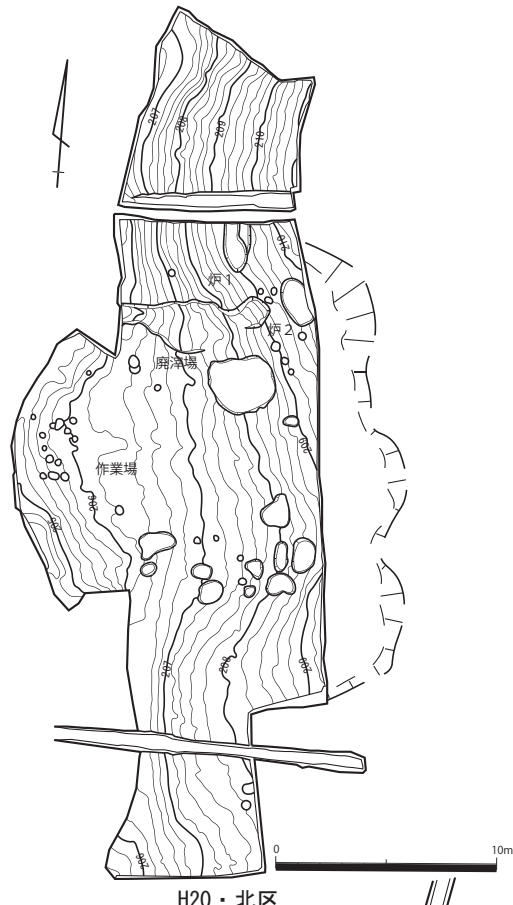
H六・調査区では、下段部から中段部、そして上段部と三段の平坦面に一二基の製鉄炉が築かれている。操業は下段部から始まり、中段、上段部へと続き、三種類の製鉄炉が検出され、安積山遺跡の製鉄炉の変遷が明らかになった。第一段階（図4-8）は細長い地下構造をもち両端に排滓溝を配置した、平面形「コ」字形のタイプ（角田分類A1-b型・大道分類¹⁶播磨1型）、第二段階（図4-9）は楕円形ないしは長方形の地下構造で、長さ/幅の比が三以下のもの（角田分類A2-a



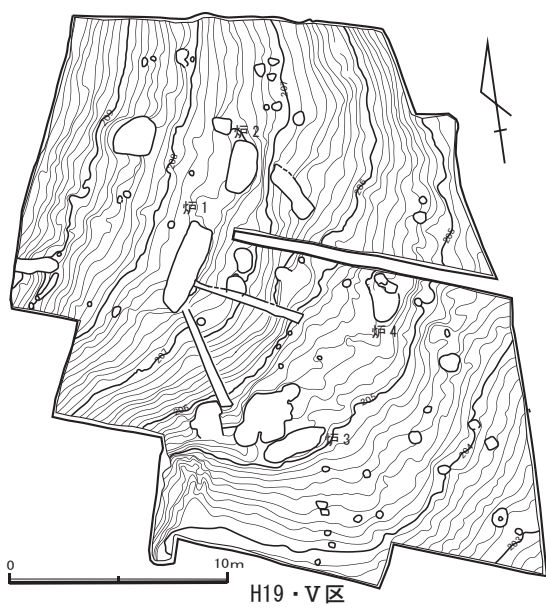
調査区位置図



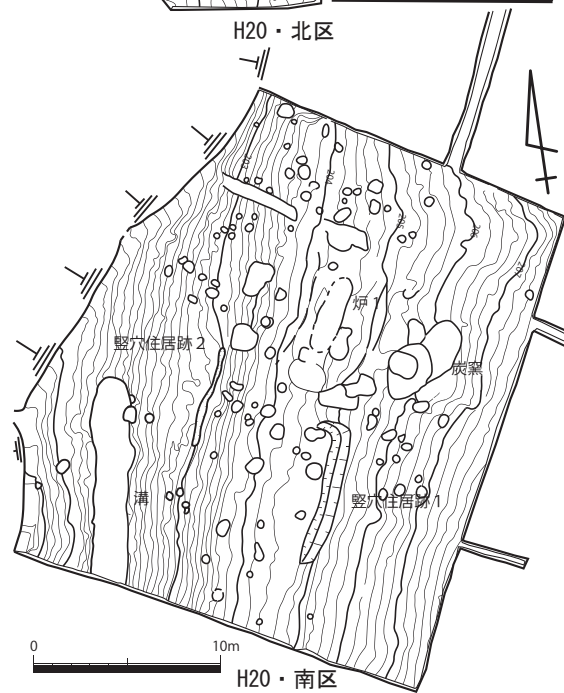
H6・調査区



H20・北区



H19・V区



H20・南区

図3 安積山遺跡全体図

遺構名	炉下部構造(舟形土坑)			箱形炉	
	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	幅(m)
Ⅲ-1	6.1	1.35	0.4	3.15	0.75
Ⅲ-2	4.6	1.4	0.4	3.0	0.7
Ⅲ-5	5.5	1.5	0.35	3.1	0.7
Ⅱ-1	5.8	1.6	0.4	3.2	1.1
I-8	7.0	2.0	0.3	2.8	0.8
I-7	5.3	1.2	0.3	3.4	0.9

表2 安積山遺跡 H6・調査区 大型製鉄炉地下構造の規模

型、大道分類播磨2型)。第三段階(図4-9)がいわゆる播磨型と呼ばれる地面を掘り込んだ地下構造をもち、粘土塊の混ざった土で低いマウンドを築造し、中央に長方形の炉床地下構造をもつタイプ(土佐分類播磨型、角田分類C2型、大道分類播磨4型)である。安積山第一階の平面形「コ」の字形の製鉄炉は、角田徳幸氏によれば、鳥根県雲南市大志戸 遺跡二号炉(二三世紀後半)に代表されるように出雲地域を中心にして

六世紀まで展開する製鉄炉である。安積山第二段階の楕円形ないしは長方形の地下構造の炉は、詳細な検討を経てはいないが、他の調査区(H一九・区、H二〇・北区、H二〇・南区)で見られる製鉄炉はこのタイプの可能性が高い。出雲地域・備中地域に分布しており、その出現は二三世紀以

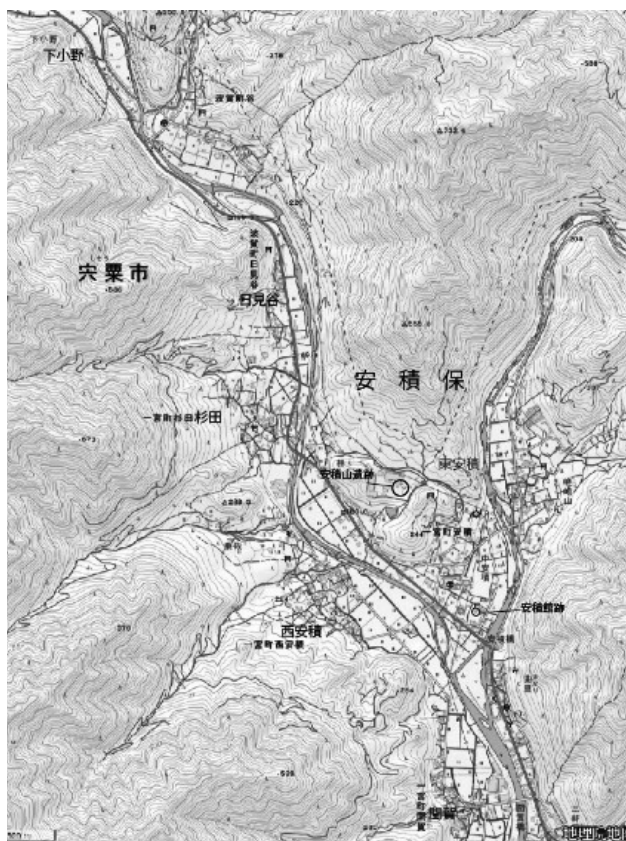


図4 安積保と安積山遺跡

降とされている。播磨の古代から中世過渡期の製鉄技術は、出雲・備中地域と密接な関わりをもつて成立した可能性が高い。

第三段階の「播磨型」と呼ぶ製鉄炉は、これまでのところ播磨地域以外では確認されていない。現状では播磨地域独自の製鉄炉と考えられ、中世播磨地域で採用される標準的な製鉄炉と理解できる。

安積山遺跡と出雲・備中地域との関わりを考える上で、文献史学の視点から興味深い研究がある。

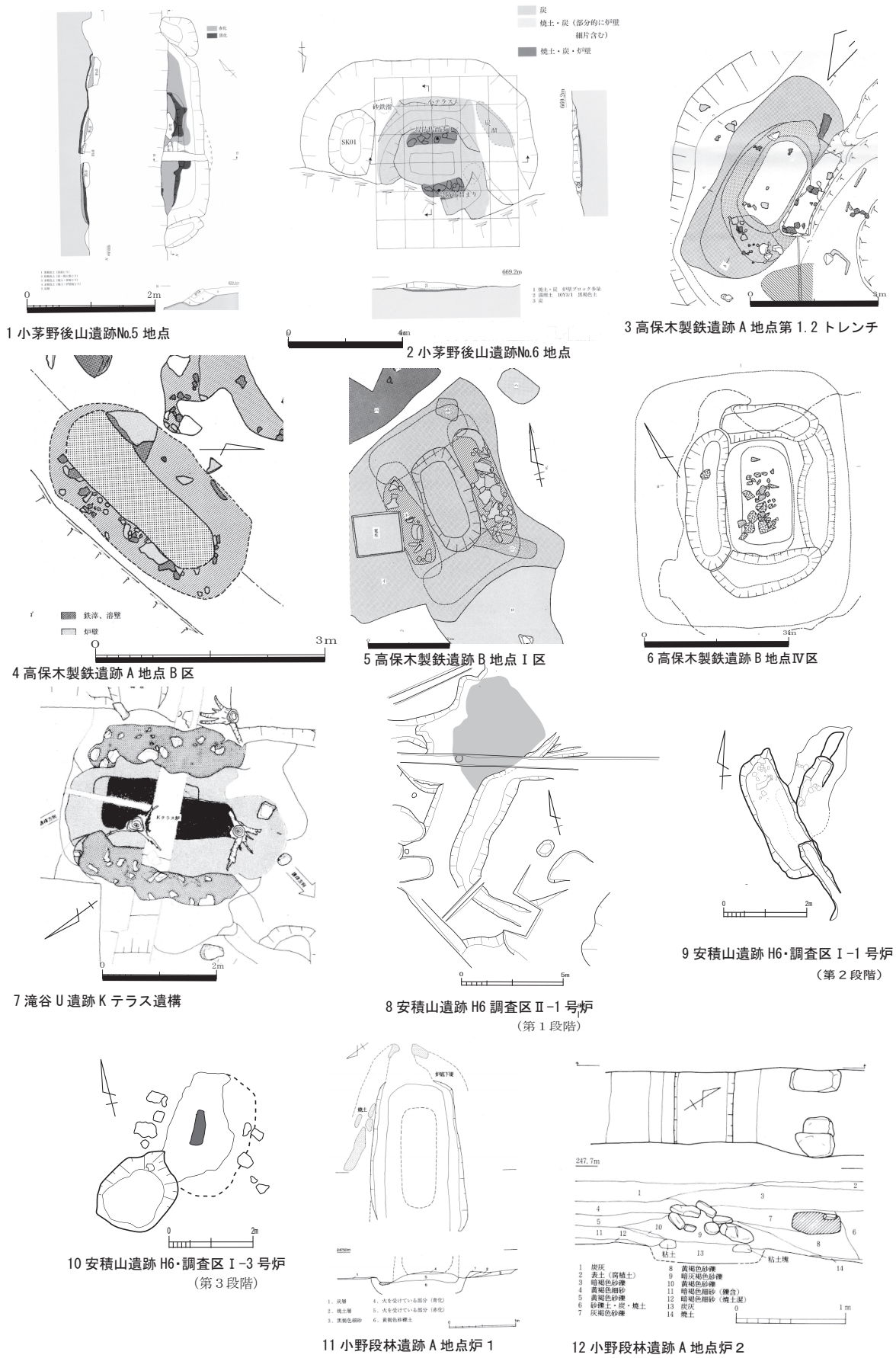


図 4 古代末～中世製鉄炉

前田徹氏は安積山遺跡の経営主体は、現在のところ明確な手掛かりがないとしながらも、この地域が播磨国衙領である安積保に含まれ、その範囲は、宍粟市一宮町閨賀・西安積・杉田・東安積、現波賀町日見谷・下小野地区に比定されている。⁽¹⁹⁾

「保」は中世国衙領の所領単位のひとつで、一般的に一一世紀末から一二世紀にかけて成立する。安積保もこの時期に成立したと見られ、安積山遺跡の操業と重なることや、遺跡周辺が花崗閃緑岩地帯で、製鉄原料の砂鉄の入手が安易であること、播磨国南部の中心部と但馬国、因幡国を結ぶ交通の要衝であることから、安積山遺跡の製鉄には国衙が関与していた可能性を想定している。そして安積保の下司・公文両職であった安積氏と製鉄との関係にも触れているが、安積氏の安積山遺跡への関与については、その可能性が考えられるが、断定できないとする。

安積山遺跡の操業主体が播磨国衙であるとすれば、第一段階・第二段階の出雲・備中地域との技術的な関わりは、国衙が主体となり出雲・備中地域から製鉄技術の導入をはかった結果と理解する

ことも可能で、今後注視する研究視点と考える。

(2) 播磨型の展開

安積山遺跡第三段階の播磨型の製鉄炉は、地下構造の違いから二つの類型に大別される。角田徳幸氏の分類に従うと、マウンドの構築の際、防湿機能を高めるため、地山を掘り下げる掘形をもつタイプ(角田分類C2型⁽²⁰⁾、大道分類播磨4型⁽²¹⁾)と地山に直接マウンドを築き、掘形をもたないタイプ(角田分類C1型、大道分類播磨3型)である。掘形をもつ播磨型タイプは、前述した揖保川上流域の安積山遺跡第三段階に相当する。千種川上流部支流の一四世紀と考えられている高保木遺跡では五基の製鉄炉が確認され、うちA地点一・二トレンチ(図4-3)、B地点区(図4-5)、同区B炉(図4-6)の三基は掘形をもつタイプである。しかしA地点B区の製鉄炉(図4-4)は掘形をもたないタイプで、両タイプの播磨型製鉄炉が併存している。この状況を丸山竜平氏は掘形をもたないタイプをから、掘形をもつタイプへと地下構造が発展していく変化と捉えている。⁽²²⁾ 掘

地域	遺跡No.	遺跡名	立地	調査区	遺構	製鉄炉下部構造規模(m):長さ×幅×高さ	時期	備考
千種川上流支流域	31	小茅野後山遺跡	谷部斜面	No.5	製鉄炉下部構造1基	楕円形? 残存規模(3)×(0.7以上)×0.05	炉 ¹ C:1320±30	本床状遺構の両端に溝を確認 角田分類:A型
				No.6	製鉄炉下部構造2基 作業場、鉄滓捨場	炉 ¹ :盛土部3.6×3.3×高さ0.15 カーボンペレット0.72×1.55 炉 ² :盛土部2.9×1.5 カーボンペレット2.3×1.0	炉 ¹ 考古地磁気1350~1425年 炉 ² :1460±30年、 ¹⁴ C:1280±30年	炉の斜面側に溝が通る。本床状遺構の両脇にないしは片側に炉壁片を含む粘土ブロック壁。地下構造なし。角田分類:C1型(土佐分類:播磨型)
	32	高保木製鉄遺跡	山腹斜面	A地点第1・2トレンチ	製鉄炉下部構造1基	マウンド:5×1.6×0.2 本床状遺構:2×1×0.25	14C	鉄滓からなる層で本床状遺構の周囲を囲む。本床状遺構の周囲には炉壁による堤防状の盛土。掘形なし。川越分類:II-1、河瀬分類:C 角田分類:C2
			山腹斜面	A地点B区	製鉄炉下部構造1基	マウンド:1.6×3.1×0.4 本床状遺構:2.5×0.7×0.15	14C	川越分類:1-1a 角田分類:C1
千種川上流支流域(白名倉山南麓)	33	滝谷U遺跡	山間斜面	Kテラス	製鉄炉下部構造2基	Kテラス炉マウンド:3.6×3×5.36×(0.3) 本床状遺構:2.0×1.4 炉:推定0.6×1.3×0.15	中世	本床状遺構の両脇に炉壁片を含む粘土ブロック壁。角田分類:C1
			山間斜面	B地点I区	製鉄炉下部構造1基、鉄滓捨場	マウンド:4.6×(4.4)×0.4 本床状遺構:2.64×1.36×0.3	14C	本床状遺構の周囲(4面)に土嚢を配置。うち本床状遺構長側両側の土嚢内に炉壁片が混入(粘土ブロック壁)。土坑状の地下構造。川越分類:II-1、河瀬分類:C 角田分類:C2
播磨川上流部支流域	37	小野段林遺跡	山間裾部	A地点	製鉄炉下部構造2基	B炉マウンド:4.28×5.36×(0.3) 本床状遺構:2.4×1.3×0.15	14C	本床状遺構の周囲(4面)に土嚢が配置。土坑状の地下構造。川越分類:II-1、河瀬分類:C 角田分類:C2
			山間裾部	B地点	製鉄炉下部構造1基	不明	不明	中世

表3 中世製鉄遺跡一覧

形をもつタイプは現時点ではこの二遺跡のみである。掘形をもたない播磨型タイプは、揖保川上流支流域の小野段林遺跡一・二号炉(図4-11・12)、千種川上流部支流域では、小茅野後山遺跡 六地点炉一(図4-2)・二、滝谷U遺跡Kテラス炉(図4-7)・同テラス上部炉の六基が確認されている。

播磨型の開始年代について言及すると、平安時

代後期から末期の安積山遺跡第三段階の掘形をもつ播磨型炉が候補となるが、出土状況が遺跡の最終段階に相当する上段面直上ではなく、さらに上層面を掘り込んだ地下構造である点を考えると、安積山遺跡の年代をそのままではめることに躊躇する。現段階で言えることは、小茅野後山遺跡出土の掘形をもたないタイプ、炉2のC年代測定値を参考に、一三世紀後半頃と推定している¹⁴。

安積山遺跡第二段階では、長さ/幅比三以下の楕円形ないしは長方形に掘り込む地下構造をもつ製鉄炉が確認されている。このタイプは、安積山遺跡鉄生産の中心的な炉である。これと同タイプと思われる地下構造をもつ製鉄炉が、千種川上流支流域の小茅野後山遺跡 五地点で確認されている(図4-1)。¹⁴C年代測定値を参考にして、一四世紀前半頃に比定できる。安積山遺跡で採用されたこのタイプの製鉄炉は中世においても存続し、播磨の中世鉄生産の一翼を担ったと考えられる。

おわりに

以上、上柁・大道両氏の製鉄炉地下構造研究に加え、筆者の研究成果をまじえながら、播磨の古代・中世鉄生産研究の動向について述べた。

たたら製鉄研究班の設立以降、私に課せられた役割は、これまで積み上げられてきた播磨の古代・中世製鉄遺跡資料を私なりに整理し、情報として発信する基礎的作業であった。研究の基本となる製鉄遺跡の調査資料は、多くが概報程度の報告にとどまり、遺跡によっては、情報も断片的で研究資料として扱うことに戸惑いがあった。そのため、当班の活動の柱のひとつに基礎的調査をあげ、これまで活動してきたが、まだ道半ばの状況である。本年度で当班の調査・研究活動は終了となるが、十分にその役割を果たしたとは思えないのが残念である。だが内部研究会における研究発表には、班員以外にテーマに応じて外部研究者が参加し、議論を深められたことは望外の喜びであったことを記して本稿を終わる。

また製鉄に関する研究以外に、古代の鍛冶に関

する真鍋成史氏の研究発表、文献史学の立場から千種鉄の流通について論じた大村拓生氏の研究があるが、紙面の都合で、本稿では割愛したことをお断りする。

本稿を終わるにあたり、安積山遺跡に関する資料の公開にご協力いただいた宍粟市教育委員会をはじめ、たたら製鉄研究班の内部研究会に外部より積極的に参加いただき、議論を深めていただいた角田徳幸、上柁武、大道和人、平石充、松尾充晶の各氏には、感謝する次第である。

- (1) 村上泰樹「播磨北西部の古代鉄生産研究の現状と幾つかの視点」(『ひょうご歴史研究室紀要』三、兵庫県立歴史博物館、二〇一八年)、八四頁。大村拓生「千草鉄の流通と刀剣」(『ひょうご歴史研究室紀要』四、兵庫県立歴史博物館、二〇一九年)、四一頁。村上泰樹「古代末～中世の製鉄遺跡・宍粟市安積山遺跡の研究に向けて」(『ひょうご歴史研究室紀要』四、兵庫県立歴史博物館、二〇二〇年)、一〇九頁。上柁武「古代吉備と西播磨の製鉄遺跡」(『ひょうご歴史研究室紀要』七、二〇二二年)、六八頁。

(2) 図1は、左記論文掲載の製鉄遺跡分布図をもとに作成した。

- 村上泰樹「播磨北西部の古代鉄生産研究の現状と幾つかの視点」(『ひょうご歴史研究室紀要』三、兵庫県立歴史博物館、二〇一八年)、八五頁。同「兵庫県播磨北西部の中世製鉄遺跡について 小茅野後山遺跡調査報告書のまとめにかえて」(『兵庫県立考古博物館研究紀要 石野博信名誉館長米寿記念号』一四、兵庫県立考古博物館、二〇二二年)、四一頁。
- (3) 兵庫県教育委員会編『製鉄遺跡(波賀町)』(兵庫県教育委員会、一九九四年)。同編『製鉄遺跡(佐用郡)』(兵庫県教育委員会、一九九二年)。
- (4) 上梅武「古代吉備と西播磨の製鉄遺跡」(『ひょうご歴史研究室紀要』七、兵庫県立歴史博物館、二〇一二年)。
- (5) 平城宮東院地区SD3236C出土の荷札木簡「美作国勝田郡和気郷輪調鉄吉連」は下坂遺跡に隣接する和気郷内で製鉄が行われていたことを示していると考えられる。
- (6) 藤木透「カジ屋遺跡」(『平成六年度埋蔵文化財調査年報』佐用町教育委員会、二〇一五年)、八頁。
- (7) 大道和人「日本古代鉄生産の開始と展開 七世紀の箱形炉を中心に」(『たたら研究』五三、たたら研究会、二〇一四年)。
- (8) 村上泰樹「播磨北西部の古代鉄生産研究の現状と幾つかの視点」(『ひょうご歴史研究室紀要』三、兵庫県立歴史博物館、二〇一八年)、九二頁。
- 筆者は周溝をもつカジ屋遺跡の年代を、同じ周溝を

もつ六世紀後半に比定されている岡山県総社市千引力ナク口谷製鉄遺跡の存在を念頭に七世紀を遡る可能性を考えた。

- (9) 大道和人「近畿地方」(鳥根県古代文化センター編『たたら製鉄の成立過程』鳥根県教育委員会、二〇二〇年、二二頁)、同「近畿地方からみた古代播磨の製鉄」ひょうご歴史研究室たたら製鉄研究班第二回研究会発表資料、二〇二二年)。
- (10) 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著『風土記 常陸国・出雲国・播磨国・豊後国・肥前国』(山川出版社、二〇一六年)より抜粋。
- (11) 土佐雅彦「佐用郡内の製鉄遺跡」(広島大学文学部研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』溪水社、一九九三年)、二八六頁。大道和人「日本古代鉄生産の開始と展開 七世紀の箱形炉を中心に」(『たたら研究』五三、たたら研究会、二〇一四年)、一〇二二頁。
- (12) パリノ・サーヴェイ株式会社「坂遺跡・山平B遺跡出土炭化材の14C年代測定」『製鉄遺跡(波賀町)』(兵庫県教育委員会、一九九四年)、一〇六頁。
- (13) 平瀬順一・藤木透「佐用郡の製鉄遺跡」(『製鉄遺跡(佐用町)』兵庫県教育委員会、一九九二年)、六三頁。
- (14) 一宮町教育委員会・宍粟郡広域行政事務合編『安積山遺跡』(一宮町文化財調査報告九、宍粟郡一宮町教育委員会、一九九六年)。
- (15) 村上泰樹・田路正幸「古代末から中世の製鉄遺跡・

- 宍粟市安積山遺跡の研究に向けて」(『ひょうご歴史研究室紀要』五、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室、二〇二〇年)、一〇九頁。
- (16) 角田徳幸「中世鉄生産と近世たたらの成立」
 (『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂、二〇一四年)、四八頁。
- (17) 大道和人「近畿地方」(島根県古代文化センター編『たたら製鉄の成立過程』島根県教育委員会、二〇二〇年)、二六頁。
- (18) 土佐雅彦「播磨の鉄」(『播磨風土記の巻 風土記の考古学』一、同成社、一九九四年)、二二四頁。
- (19) 前田徹「中・近世宍粟の産業と領主」(『播磨の生業と武士』企画展史料集二三、兵庫県立歴史博物館、二〇〇四年)、一三三・二四・二六頁。
- (20) 註15。
- (21) 註16。
- (22) 丸山竜平他『高保木製鉄遺跡』(千種町教育委員会、一九八九年)。
- (23) 村上泰樹「兵庫県播磨北西部の中世製鉄遺跡について 小茅野後山遺跡調査報告書のまとめにかえて」(『兵庫県立考古博物館研究紀要 石野博信名誉館長米寿記念号』一四、兵庫県立考古博物館、二〇二一年)。